ブレシャ市立サンタ・ジューリア美術館について

――市立美術館の一つのあり方――

石　井　元　章

はじめに

北イタリア、ロンバルディーア州にあるブレシャ市は、1999年サンタ・ジューリア美術館を開館した。この美術館は古い修道院を中心に3つの教会、古代ローマの遺跡などを敷地の中に含む「生きた美術館」の代表例であり、ブレシャ市の豊かな経済力を背景にして現在イタリアで最も成功した市立美術館の一つと考えられている。その成立には私的財団と市当局が対等な形で関わり、官民融合の美術政策としても注目に値する。また、フランスのルーヴル美術館に見られる「帝国主義的」とも言える巨大な美術館構想に対して、もともとある文化財を最大限に生かしながら「人間的な規模」で人に優しい美術館を作り上げた点で、非常にイタリア的であるとも言えよう。

本稿においては、サンタ・ジューリア美術館の成立過程を紹介しながら、文化財の豊かな地域における公立美術館の一つの在り方を探ってみたい。

ブレシャ市について

当該美術館について述べる前に、ブレシャ市の歴史を概観しておかなくてはなるまい。過去の遺跡を内包する美術館がそもそも成立することになった背景を理解するのに大きく貢献すると考えるからである。

ミラノから列車で東に約1時間、ブレシャ市は北イタリアに広がるポー川平原と前アルプス山岳地域のちょうど中間に位置する人口約 20 万人の中規模の都市である。ローマ帝国の時代には輝かしい繁栄を誇り、その遺構は町の北側サンタ・ジューリア美術館に隣接するカピトリーノ神殿や劇場、ローマの広場（フォルム）として残っている。中世においてはまずロンゴバルド公国（8世紀）となり、その後12-13世紀に自由自治都市に移行してロンバルディーア同盟の一員となった。この時期に市の中心的な聖堂であるサン・サルヴァトーレ聖堂、旧大聖堂、サン・フランチェスコ聖堂などが建設された。1426年以降ヴェネツィア共和国の支配下に入り、同共和国がナポレオンによって崩壊する1797年までその一都市として盛えた。この時代に露台やサンタ・マリア・デイ・ミラーコリ聖堂などの優雅な建築物が造営され、15世紀ロンバルディーア地方最大の画家ヴィンチェンツォ・フォッパ（1427年頃-1515年頃）をはじめとしてジェローラモ・ロマニーノ（1484年頃-1559年以降）、アレッサンドロ・モレット（1498年-1554年）、ジョヴァン・ジェローラモ・サヴォルド（1480年頃-1548年以降）などの大画家を生み出した(1)。

現在のブレシャ市はロンバルディア州の中でも産業経済活動の最も盛んな都市の一つで、金属器械や重器械を中心に産業が発達している。その工場で働く外国人労働者としてイタリアで最も多くのアフリカ人移民がこの町に暮らしている。

しかし、ブレシャ市の住民は経済活動ばかりに目を向けるのでなく、長い歴史と豊かな文化に支えられて旺盛な知的好奇心を見せてきた。その一つの例が19世紀に日本駐在イタリア公使（現在の大使に当る）を勤めたアレッサンドロ・フェー・ドスティアーニ伯爵である。彼は19世紀に重工業に手を染めた貴族の出身で、実業家であると共に、法律を学んで外交官となった。1870 年から足掛け 7 年に渡る日本駐在の間に明治天皇から感謝の宝剣を下賜されたこともあるフェー・ド

スティアーニ伯爵は、高級官僚との深い交わりの中で数多くの日本絵画を収集した。伯爵の令嬢がブレシャ市に寄贈したこれらの作品は現在、同市立トジオ・マルティネンゴ美術館に収蔵されている(2)。

サンタ・ジューリア美術館の成立

前述したローマ時代の遺跡が集中する町の中心部（イタリア語では centro storico、すなわち「歴史的中心部」と呼ぶ）の北東部分、カピトリーノ神殿地域に「祖国の美術館（Museo patrio）」を設立しようとする考えが生まれたのは1830年代に溯る。この時代のイタリアを考える時には注意を要する。ちょうど祖国統一の前夜に当るからである。18世紀にブレシャを支配していたヴェネツィアはナポレオンによる共和国崩壊後フランス領となるが、1815年のウィーン会議によりミラノと共にオーストリアに割譲された。これ以降北イタリアの諸都市はオーストリアのハプスブルク王朝に対して独立運動を起こす。サヴォイア家の王を戴くイタリア王国が 1861 年トリノを首都として成立した後もこの独立運動は続き、1866年にやっと北イタリアはイタリア王国に併合された。こうした状況の中で「祖国の美術館」という構想は、歴史文化的に重要なだけではなく、愛国行為の象徴と見做されたのである。

カピトリーノ神殿に設けられたこの「祖国の美術館」は、次いで「ローマ時代美術館（Museo dell'età romana）」となったが、その収蔵品の一部が1882年にサンタ・ジューリア聖堂を利用した「キリスト教時代美術館（Museo dell'età cristiana）」にも展示された。続く時期に行われたこのキリスト教時代美術館の再編を通して、ローマ時代の遺構やその他の建物の調査が徹底的に行われ、その結果この区域の歴史文化財についてより深い知識が得られることになった。これがさらに次の段階へ踏み出す決定的な役割を担ったのである。

市の美術・歴史博物局に支えられた市当局は 1976 年、美術史家のアンドレーア・エミリアーニ Andrea Emiliani にサンタ・ジューリア修道院【図1】および考古学発掘地域に市立美術館を設置するための計画案を依頼した。そこで目指されたのは「町自身が

【図1】サンタ・ジューリア修道院北回廊

自己表現できる唯一の美術館」、すなわちブレシャにしかできない独特な美術館の創出であった。

1978年に開かれた「ブレシャ市のサン・サルヴァトーレ聖堂ー美術館のための資料Ⅰ」、および翌年の「ローマ時代のブレシャー美術館のための資料Ⅱ」と題する二つの展覧会は、その意味で市民が自分達の町を知るよい機会を提供した。

エミリアーニの原案に基づき 1979 年に市当局による修復作業が開始されたが、10 年後の 1989 年には文化・環境財庁とロンバルディーア州が、1997 年にはブレシャ市の CAB 財団（Credito agrario bresciano ブレシャ農業信託財団）が経済的援助を申し出た。次いでこの原案は新たに設けられた科学調査委員会に受け継がれたが、美術館の中で各セクションに分けられた基本的な訪問経路はエミリアーニの原案通り維持された。共同研究者の選択などは市の美術・歴史博物局が行った。トジオ・マルティネンゴ美術館、イタリア統一博物館、マルツォーリ武器博物館などを管轄する当該博物局の内部では、サンタ・ジューリアに設けられる市立美術館の企画が特別な重要性を持ち、ブレシャ市に存在する数多くの異質な歴史資料を地域の歴史文化的独自性を強調しながら展示するための美術館としての位置づけが進んでいった。

これまでこの計画には 57.700.000.000 リラ（平成 13 年 6 月 15 日現在のレートで約 3.102.000.000 円）が支出され、そのうち 37.700.000.000 リラが 1979 年から 1999 年までの作業に使われた（援助金は市、州、国および私的・公的団体が拠出）。1997 年から 2002 年までの支出は 20.000.000.000 リラで半分が市から、残りの半分

がCAB財団から出された。2000年から2004年までの期間には2.000.000.000リラが市とCAB財団から同等の支出分で計画されている。

建築部分の修復にあたってロマニーノのフレスコ画や石碑の修復作業も行われた。現在の敷地面積は16.430平方メートルであるが、将来これに14.000平方メートル近い考古学公園が付設されることになっている。

「カピトリーノ神殿からサンタ・ジューリア修道院沿いのローマ時代のブレシャ」と銘打つ計画には当然カピトリーノ神殿やパッラヴェーリ家邸宅の修復も含まれる。パッラヴェーリ家邸宅では北イタリアで唯一の現存例とも言われる紀元前1世紀のすばらしいフレスコ画が最近発見された。

CAB財団の参入によってこのサンタ・ジューリア美術館の開設計画は特別な意味を持つことになった。すなわち自治体レヴェルで官民が合同して行うものとなったのである。これによって一つの「協力関係」が成立したといわれる。CAB財団の経済的援助は次の3点に集約される。

1. サンタ・ジューリア修道院修復作業の完遂のため市当局が拠出した資金を支え、かつ拡大すること。これによって新しい市立美術館が来観者や市民により早く公開されるよう促進する。
2. 2000年に開催された大展覧会「ロンゴバルド族の将来ーイタリアとカルロ・マーニョのヨーロッパの建設」の実現。この展覧会はヨーロッパ・レヴェルでの企画「Charlesmagne and the making of Europe」の一部として企画された。
3. 1999年から2004年までサンタ・ジューリア美術館で企画される展覧会や文化事業に対する経済的援助

これらの3つの目的は、サン・サルヴァトーレ聖堂とサンタ・ジューリア聖堂を中心とする記念物の総体を最終的に市に返却する（すなわち、市民共通の利益に資する）ことによって、ブレシャ市の象徴をイタリアの、そして国際的なレヴェルでの人々の認識に供しようというものなのである。

＊

さて、参考のために1999年7月16日にブレシャの地方紙に報道された記事を翻訳しておこう。

サンタ・ジューリア市立美術館実現す

残りのセクションも含めた全体が開館（修道院、先史時代および原始時代、ローマ時代、ヴェネツィア共和国支配下の時代、収集趣味、応用美術品）

イタリアの美術館の中でも最も重要で独特な企画の一つと思われるものを共同して推進しているブレシャ市とCAB財団は、数年前には不可能と思われていた計画を経済的・組織的努力により可能にした。事実1999年7月16日サンタ・ジューリア市立美術館が開館することになったのである。ブレシャ銀行がスポンサーとして実際の操業に加わった。

ロンゴバルド族が古代ローマ帝国の遺構の上に建設した修道院を敷地とする点で、展示方法、建物においてイタリアだけでなくヨーロッパ全体で唯一独自の例とも言えるこの美術館は、ブレシャの歴史・芸術・精神を先史時代から現代まで概観する旅を可能にしてくれる。魅力溢れる卓抜した記念碑の複合体が、数十年に渡る考古学的研究・発掘・修復作業を経て、近代的概念における美術館すなわち革新的なモデルに基づく美術館として生まれ変わったのである。

これは国際的に見ても全く新しい企画である。それは、二つの回廊周囲とフレスコ画で豊かに飾られた三つの教会に渡る12.000平方メートルに広がる展示空間であり、成長発展を続ける「実験室」としての美術館である。開館した後も、隣接するローマ時代の遺跡、特に所謂Domus dell'Ortaglia（菜園の家）を敷地に取り込むことにより新しいセクションが拡大し続ける見込みである。これによって考古学部門はフォルム区域からローマ時代の城壁までの広大な区域をその美術館訪問行程に収めることになる。

ロンゴバルド族の王デジデーリオとその后アンサによって753年設立されたベネディクトゥス派女子修道院のサン・サルヴァトーレとサンタ・ジューリアの両教会はシャルル・マーニュがロンゴバルド族を制圧した後も、宗教・政治・経済のすべての面で第一義的な役割を果たした。数世紀に渡って歴史の記憶が積み重なった真の場所、そして美術上の驚くべき発見が絶え間なく起こる源泉として、ローマ時代のdomusの上に築かれたこの修道院の複合体には、サン・サルヴァトーレ聖堂とロマネスク様式のサンタ・マリア・イン・

ソラーリオのオラトリオ、および16世紀に建てられたサンタ・ジューリア聖堂、ルネサンス期の回廊などが含まれている。

ブレシャの町の歴史が重層的に残るサンタ・ジューリア地区の複合体は従って、新しい市立美術館の建物として運命付けられたものなのである。それが他の記念碑的建築物と共に美術館探訪の中心となる。そしてこれこそがこの美術館をかくも独特なものとする中心的要素となっているのである。展示のための「容器」と展示物との間に歴史的側面ばかりでなく物質的側面でも非常に緊密な関係が存在するからである。先史時代から19世紀に至る11.000にも及ぶ作品がブレシャ市の歴史・文化的な顔を再構成している。サンタ・ジューリア修道院の修復作業および美術館への改変は1980年代初頭に始まり、1989年からは文化財庁とロンバルディーア州からの経済的援助を得て決定的な段階を迎えた（FIOプロジェクト）。

しかしながら、市当局と市の美術・歴史博物局は1976年に複合体全体の美術館への改変案を研究するようアンドレーア・エミリアーニに依頼していた。

いくつかのセクションに分けられたエミリアーニ計画の大綱は特別に組織された科学調査委員会によって発展を見、収蔵作品はブレシャ市美術・歴史博物局が整理した。

この活動と並行してフレスコ画や石碑の修復、考古学的発掘が行われ、ローマ時代から中世前期に至るまで大いなる科学的成果をもたらした。北イタリアで最も重要な考古学上の遺構ともいえるこの場所で行われた調査は、40にも上るローマ時代の住宅を含む居住地区に光を当てることになった。その中には白黒のモザイクで作られた床を持つものもあり、また彩色を施された紋章も見つかっている。加えてロンゴバルド族の初期の定住跡も発掘されており、北イタリアにおける同民族の歴史に関して顕著な新知見が得られたのである。

サンタ・ジューリア市立美術館は、様々な時代の町の顔が浮かび上がる多様で相互に継続した資料を我々に提示してくれる。サンタ・ジューリア記念地区自身の豊かさのおかげで、この複雑な歴史変遷を「フィールドで」検証することが可能になるのである。この美術館は従って、これまで一度も展示されたことのなかった遺跡からの出土品に加えて、ブレシャ由来のコレクション中にある歴史的作品（例えば、著名な8世紀の《デジデーリオの十字架》）を、大部分修復し整理し直して収蔵・展示している。美術館開館は1998年7月に始まった現在も進行中の仕事の一つとして見做される。まず最初に完成したのは、「ローマ時代　碑文と町」および「ヴェネツィア共和国支配下の時代　町のイメージと記念的彫刻」の二つのセクションであった。前者は驚くべき規模の美しいモザイク（例えば60平方メートルに及ぶサン・ロッキーノ地区のdomus出土の彩色モザイク）、建築物の一部、副葬品、金箔を施した高価な青銅作品、石碑などを展示する。後者は多数の彫刻作品、フレスコ画、施釉テラコッタ製の作品、アレッサンドロ・ヴィットーリアの作品などを展示することで15・16世紀におけるブレシャ市のイメージを復元しようとした。

同年10月には「中世前期　ロンゴバルド族とカロリング朝」のセクションが完成し、ストゥッコや彫刻作品を研究の結果、オリジナルの配列に直した素晴らしいサン・サルヴァトーレ聖堂も公開された。同時に完成した「自治都市と君主制」のセクションには、11世紀末から15世紀初頭に作られた建物に付随する建築部分、彫刻、フレスコ画などが展示された。（以上新聞記事）

ここでもう一度美術館開館までに行われた発掘調査と修復を箇条書きにまとめておこう。

・1980-1992　サンタ・ジューリア全体の発掘により6つのペリステリウム周辺にモザイクで装飾された40軒の家からなる住宅の複合体が発見される。モザイクの中には幾何学文様【図 2】やメデューサの首を表す素晴らしい仕上がりのものもある。住宅の建築時期は紀元1世紀後半から5世紀中葉にあたるが、ローマ帝国衰退期にあたる5世紀には木造の掘建て小屋やロンゴバルド族の住居が見られる。

【図 2】domus から出土したモザイクの幾何学文様の一例

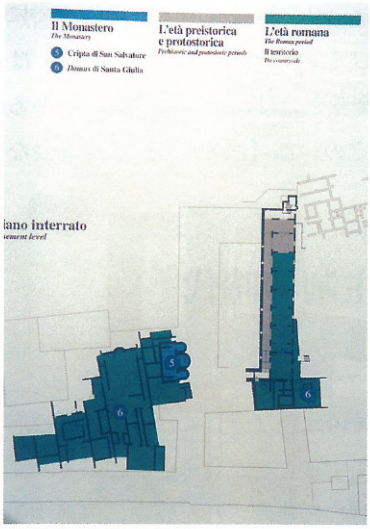
・象牙製の聖遺物用小櫃（リプサノテカ）（4 世紀）修復
・カピトリーノ神殿の「納戸」から出た所謂《囚われ人》の彫刻（2 世紀中頃）の修復
・同じくカピトリーノ神殿の「納戸」に由来する金箔を施した青銅の頭部（《セプティムス・セウェルス》2 世紀末-3 世紀初頭、《プロブス》3 世紀中頃、《ゴート人クラウディウス》3 世紀中頃）の修復
・サンタ・ジューリア修道院内部で発見されたローマ時代のフレスコ画の修復
・皇帝を表す金箔を施した青銅の頭部の修復
・サンタ・ジューリア修道院内旧面会所下に発見されたローマ時代のモザイクとフレスコ画の予備的修復
・サン・ロッキーノ聖堂に由来する 3 つのモザイク画（2 世紀中頃）の修復。このうち一つは特別優雅で仮面モチーフの中にローマの喜劇作家プラウトゥス作の劇《ルーデンス》の一場面を扱った中央パネルを持つ
・カピトリーノ神殿の「納戸」から出土した青銅の額（1 世紀中頃）の修復
・カピトリーノ神殿出土の石碑（1 世紀中頃から 2 世紀）の修復
・町の各所から出土したモザイク（1-4 世紀）の修復
・ロンゴバルド時代の作品（金属、6-7 世紀）の修復
・サンタ・ジューリア聖堂合唱隊席にフロリアーノ・フェルラモラとパオロ・ダ・カイリーナが描いたフレスコ画連作（16 世紀）の修復
・サンタ・マリア・イン・ソラーリオ聖堂上階のフレスコ画（16、17 世紀）の修復
・サン・サルヴァトーレ聖堂鐘楼にジローラモ・ロマニーノが描いたフレスコ画（16 世紀）の修復
・サン・サルヴァトーレ聖堂内にある中世前期のフレスコ画の一部を修復
・北東の回廊の外部にあるフレスコ画の修復
・南東の回廊の外部にあるフレスコ画の修復（継続中）
・修道院内部のフレスコ画修復（継続中）
・サンタ・ジューリア聖堂ファサードの大理石化粧板の修復
・サンタ・マリア・イン・ソラーリオ聖堂外壁の補強工事
・コレクション内の様々な資料（彫刻、小青銅像、応用美術品、壁から外したフレスコ画等）の修復

サンタ・ジューリア美術館概観

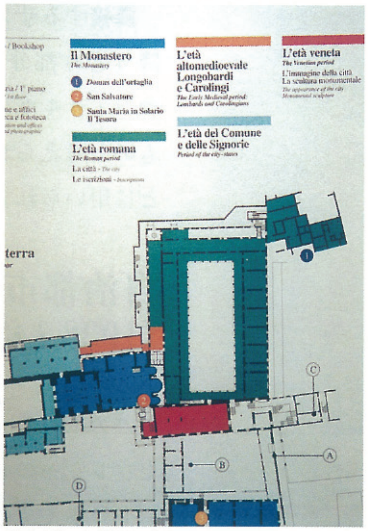
以上のことを踏まえながら美術館を年代順に見ていこう。

先史時代

サンタ・ジューリア地区の地下に広がるローマ時代の「住居（domus）」の一部を用いて展示されているのが先史時代である【図 3 の灰色の部分】。ブレシャ市の南に位置するサン・ポーロ地区から出土した展示品は、銅器時代に人が農作業等で用いたものと考えられる。ブレシャの町の基礎が置かれた青銅器時代の展示品は、チドネーオの丘、サン・タンナ、ブロレットなど町の様々な場所から出土した。続く鉄器時代に捧げられたセクションにはトロンピアの谷やカモニカの谷など周辺地区の渓谷で出土した品が展示されている。とりわけ鉄器時代後期の出土品は豊かで、マネルビオ、ヴォロンゴ、カルペネードロなどの地区から出土した碑文、古銭、陶器、金属片などが展示される。特に注目に値するのはレメデッロにあるガリア人のネクロポリスに由来する副葬品の数々であろう。



【図３】地階のプラン



【図４】１階のプラン

【図５】羽根のある勝利の像

ローマ時代

地下展示室の大部分【図３の線色部分】と１階の修道院回廊部分【図４の緑色部分】に設けられたこのセクションでは、ブレシャ周辺にローマ人が入り込んでいく過程が明らかにされる。すなわちローマから取り入れた法制度の段階的発展、ブレシャの平原がローマ人によって開墾される様子、イードロやガルダ湖周辺の山岳部に人々が入り込んでいく様子が明示されている。この時代に城壁や道、上下水道が完備したブレシャ市そのものについても触れられている。

サンタ・ジューリアの domus【図３の⑥】、および「菜園の家」【図４の①】はこの時代の住居跡をそのまま保存したものである。

次のセクションでは、ブリクシア（Brixia）と呼ばれた古代ブレシャの都市空間や代表的建築物が、建物の一部や装飾、碑文などによって紹介される。その中には、共和国の神域、ウェスパシアヌスの神殿、広場、住宅やフォルチェッロ、レブッフォーネなどの大規模なネクロポリスからの出土品が含まれる。年代的に代表例を述べると、「羽根のある勝利の像」（フラウィウス帝時代紀元１世紀後半の作品【図５】）、金箔を施した青銅で作られた皇帝の肖像彫刻、その他大理石の作品（石棺、埋葬時に用いた浮彫の肖像、フェイディアスのオリジナルを大理石に模刻したミネルウァ神の頭部【図６】）がある。

【図６】フェイディアスのオリジナルを大理石に模刻したミネルウァ神の頭部

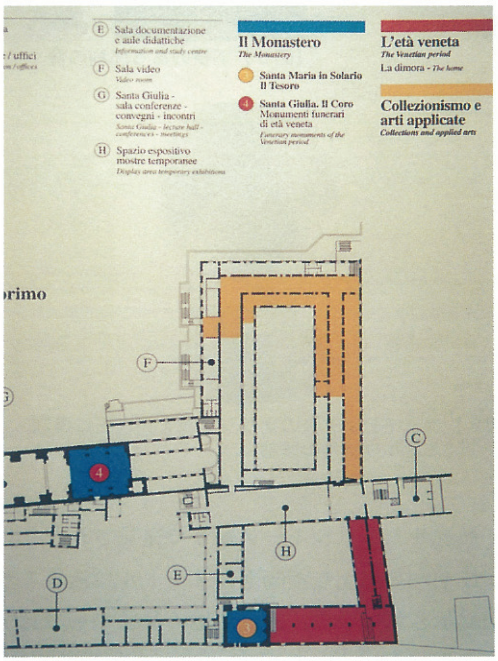
加えて最近サン・ロッキーノ通りで発見された２世紀の重要な住宅から出土した60平方メートルに渡るモザイクの床が展示されている。古代住宅の後続の形は1968年に修道院菜園で見つかった「家（domus）」の住宅に見出せる。

中世前期
ロンゴバルド族とカロリング朝

帝国末期のブレシャに見られた新しい芸術作品や都市空間の変化を紹介する【図４のオレンジ色部分】。町の様々な地区から出土した資料を通して、ゴート族からロンゴバルド族、カロリング朝までの政治的変遷を、各時代を特徴付ける美術品・工芸品と共に展示する。

この時期に建設されたサン・サルヴァトーレ聖堂【図

【図７】サン・サルヴァトーレ聖堂内部



【図８】２階のプラン

7】の建築は、この町に宗教上の重要な注文があったことを示している。図３の⑤はこの聖堂のクリプタ（地下礼拝堂）、図４の②はその上階聖堂部分である。1958年から1962年に行われた発掘調査では、ロンゴバルド族の時代（568-650）のものと考えられるdomusが地下に確認された。1989年の調査では教会の建築年代に新たな光が当てられ、上階聖堂部分とクリプタの最も古い東側部分はロンゴバルド族の定住期に遡り、その後修道院が置かれたと伝説が伝える753年に建築が再開されたことが示唆された。

隣接するサンタ・ジューリア聖堂【図４の青色の②に隣り合う部分】、およびその合唱隊席【図８の④】は、サン・サルヴァトーレ聖堂とほぼ同時期の建築にかかるものと考えられ、現在その一部【図８のG】は講演会などに用いられている。

自治都市と君主制の時代（1038-1426）

このセクション【図４の水色部分】にはコムーネ政府とブレシャの君主制に関する資料が展示されている。ブロレットやその他この時代に建設された建物に由来する彫刻、建築物の一部、フレスコ画が並ぶ。また、ブレシャの造幣所など自治都市の重要な機能に関する展示品も多い。

サンタ・マリア・イン・ソラーリオ聖堂【図４と図８の③】は中世後期に行われた修道院再編の時代に属するロマネスク様式の建物で、修道院南東回廊に沿って12世紀に建てられた。この中心部分である祈祷用小礼拝堂は方形プランに立つ２階の礼拝堂に８角形の外被が設けられ、その部分には９世紀の円柱が再利用されている。この聖堂は現在、《デジデーリオの十字架》を始めとする宝物を収蔵する。

ヴェネツィア共和国支配下の時代（1426-1797）

石材、大理石、テラコッタなど様々な材質でできた建築物の一部や装飾部分、フレスコ画は15世紀初頭から16世紀末まで、すなわちゴシック後期からルネサンスに至る町の様相を伝えてくれる【図４および８の赤色部分、図９】。この時代には露台やサンタ・マリア・デイ・ミラーコリ聖堂[3]など洗練を極めた美しい建物が市内に作られ、展示物もこれらの建物ばかりでなく当時の都市計画に基づく様々な建物に由来するものが多い。【図10】はドメーニコ・ボッラーニの墓碑（1577-78）である。貴顕の建物は多くの装飾品、家具で飾られるようになり、その一部も展示されている。

【図９】「ヴェネツィア共和国支配下の時代」のセクション

【図10】ドメーニコ・ボッラーニの墓碑（1577-78）

収集趣味と応用美術品（18・19 世紀）

応用美術品（ガラス、陶器、小青銅像、象牙、カメオ、象嵌を施した石、七宝、貴金属）の貴重なコレクションが、19 世紀の間にブレシャ市立美術館に寄贈された元来の収集家のコレクションを尊重するよう展示されている【図 8 の黄色部分】。それぞれの品物が持つ芸術的価値ばかりでなく、ガブリエーレ・スコーヴォロ、パオロ・トージオ、カミッロ・ブロッツォーニなどの寄贈者の趣味と関心を示す証左としてこれらの展示品は置かれているのである。このセクションは応用美術品制作の技術に関する教育的説明に始まり、マッツケッリ、マルティネンゴ両家のメダルコレクションに終わる。

これに続く部屋には価値の高い資料（15 世紀の写本、ガラス、木片）が展示され、その歴史・芸術上の様相ばかりでなく、制作技術に関する説明もなされている。

おわりに

以上見てきたようにブレシャ市のサンタ・ジューリア美術館は、幾層にも積み重なった町の歴史を丁寧に研究・解明してそれを十分尊重しながら市立美術館に作り上げた一つの模範例である。もちろん、すべての町が同様の試みを行える幸運に恵まれているわけではないにしても、この事例は歴史のある町で何ができるかを良く示しているように思われる。

過去の建築物を再利用して別の目的に供することはイタリアでは頻繁に行われている。ヴァネツィアのサン・マルコ付属図書館や考古学博物館（旧共和国造幣局を使用）、フィレンツェのウッフィーツィ美術館（旧トスカーナ大公国政庁［オフィス＝ウッフィーツィ］を使用）など主な美術館や図書館はこの方式を取っているし、フィレンツェのサンタ・マリア・ヌオーヴァ病院のように修道院を用いた病院も数多い。しかしながら、ブレシャ市の例が特別なのは、展示の「箱」と内容との間に緊密な関係が存在し、それを展示することがそのまま町の歴史を振り返ることになる点に存在するのである。

ここに国や州の財政援助ばかりでなく、私的財団や銀行の後援を取りつけることができた説得力もあるように思われる。

翻って日本の美術館行政は今でも「箱」を作ることに終始している例が後を絶たない。それぞれの郷土の歴史をもう一度振り返ってその価値を見直すためにも、ブレシャの例が役立つことを祈る。

註

(1) *Guida rapida d'Italia 1, Liguria, Piemonte, Valle d'Aosta, Lombardia*, Milano, Touring Club Italiano, 1986, p.80. サンタ・ジューリア美術館についてはパンフレット *Santa Giulia-Museo della città*, Brescia, Comune di Brescia, Assessorato alla Cultura, Civici musei d'arte e storia, Fondazione CAB, Banco di Brescia, 2000 を参照。当該資料を快く提供してくださった市の美術・歴史博物局のルイーザ・チェルヴァーティ Luisa Cervati 氏に心より感謝いたします。

(2) 近藤映子「北イタリア・ブレシャ市の日本絵画コレクション」『SPAZIO』37（1988）、pp.17-32、KONDŌ Eiko, *Dipinti*

giapponesi a Brescia, in *Dipinti giapponesi a Brescia - La collezione orientale dei Musei Civici d'Arte e Storia*, Brescia, Grafo, 1995, pp.13-20。石井元章「アレッサンドロ・フェー・ドスティアーニ伯爵の日本美術コレクションについての一考察」『近代画説』6（1998）、pp.99-112、ISHII Motoaki, *Alessandro Fè d'Ostiani e il Giappone - Il suo contributo agli scambi culturali tra Venezia e il Giappone*, in "Rivista dell'Istituto Nazionale di Archeologia e Storia dell'Arte"（印刷中）.

(3) サンタ・マリア・デイ・ミラーコリ聖堂の浮彫装飾については、石井元章『ルネサンスの彫刻　15・16 世紀のイタリア』東京、ブリュッケ、2001、pp.258-260 を参照。